

① 犬・猫回虫症（トキシカラ症）

犬・猫回虫症は、その名の通り犬・猫に寄生する犬回虫（*Toxocar canis*）と猫回虫（*Toxocara cati*）によって引き起こされる感染症です。


犬回虫症の特徴

成犬の場合、感染しても無症状の場合が多く、仔犬の場合、消化器症状（下痢や嘔吐）を示す場合が多く、脱水症状を起こして重篤な症状になる場合がある。仔犬の場合、母犬からの胎盤感染、乳汁感染がほとんどである。

Parasite 寄生虫

犬回虫

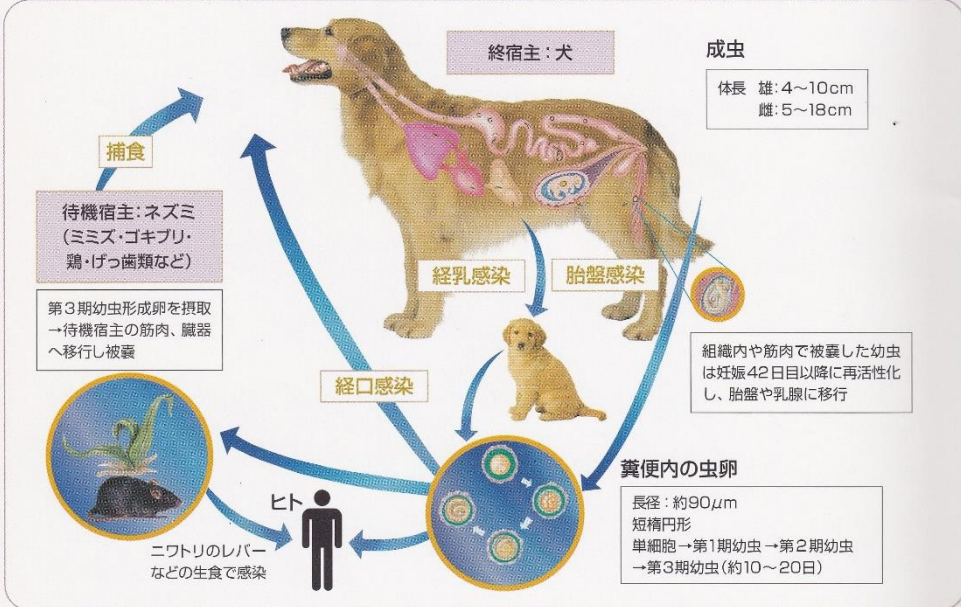
(*Toxocara canis*)



形態

犬回虫の頭頂部は真上からみると、中央に口腔が開き、その周りを3つの口唇が取り囲んでいます。また頭部近くの表皮の一部が膨らんでいる(頸翼)のが特徴です。

ライフサイクル



待機宿主: ネズミ
(ミリス・ゴキブリ・鶏・げっ歯類など)

第3期幼虫形成卵を摂取
→待機宿主の筋肉、臓器へ移行し被囊

終宿主: 犬

成虫

体長 雄: 4~10cm
雌: 5~18cm

糞便内の虫卵

長径: 約90μm
短径円形
単細胞 → 第1期幼虫 → 第2期幼虫 → 第3期幼虫 (約10~20日)

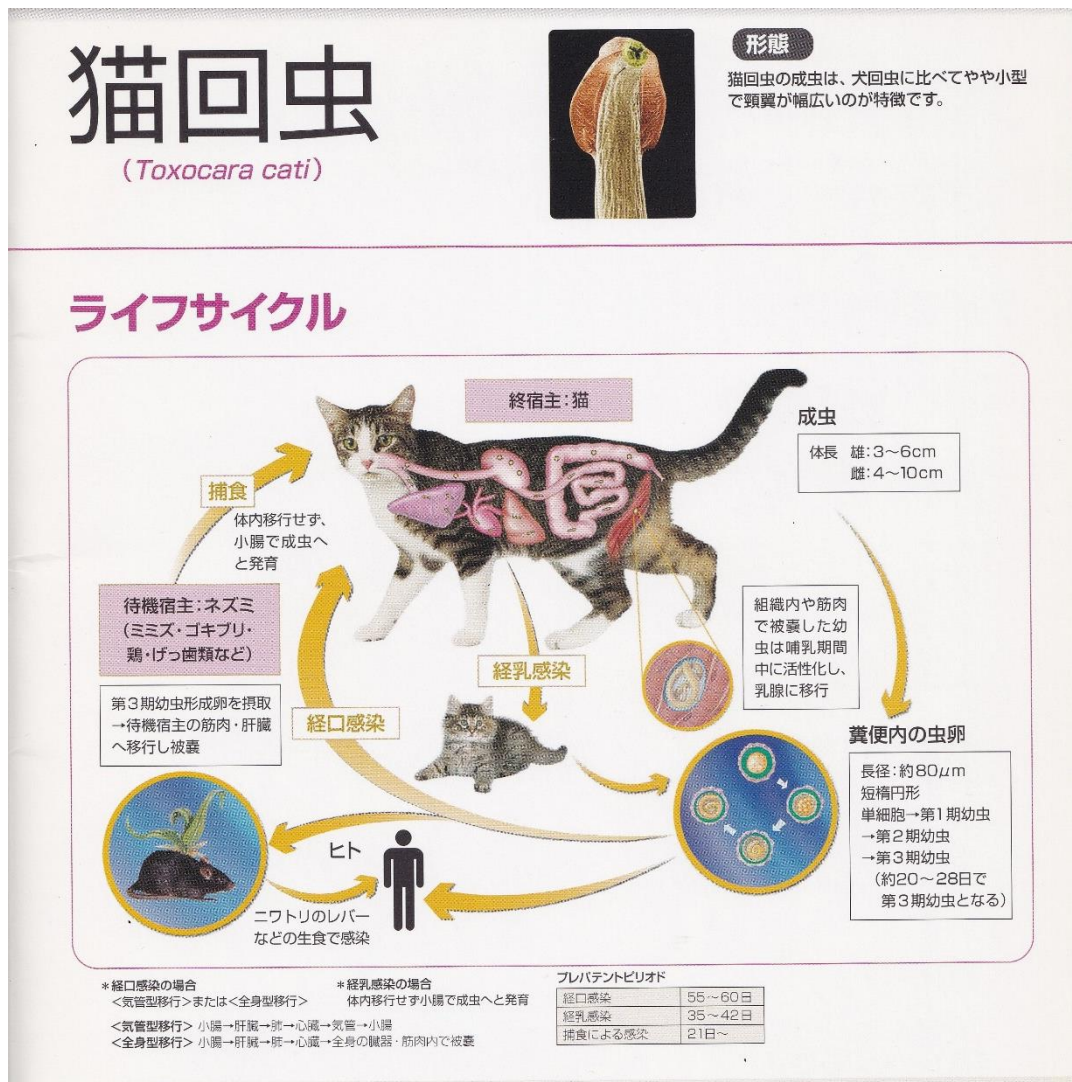
* 経口感染の場合		* 経乳感染の場合		* 胎盤感染の場合	
成犬: <全身型移行>	体内移行せず小腸で成虫へと発育	体内移行せず小腸で成虫へと発育	体内移行せず小腸で成虫へと発育	<気管型移行>	<気管型移行>
幼犬: <気管型移行>					
* 胎盤感染の場合 <気管型移行> 小腸 → 肝臓 → 肺 → 心臓 → 全身の臓器・筋肉で被囊					
* 経乳感染の場合 <全身型移行> 小腸 → 肝臓 → 肺 → 心臓 → 気管 → 小腸					

プレバテントビリオド	
経口感染	28~35日
経乳感染	35~42日
胎盤感染	21~28日
捕食による感染	19日~

(パラサイトソリューションガイド(株)バイエルより)

猫回虫症の特徴

成猫の場合、感染しても無症状の場合が多く、仔猫の場合、消化器症状（下痢や嘔吐）を示す場合が多く、脱水症状を起こして重篤な症状になる場合がある。仔猫の場合、母猫からの乳汁感染がほとんどである。（犬と違って胎盤感染がないと言われている。）



(パラサイトソリューションガイド(株)バイエルより)

治療法としては有効な駆虫薬を投与し、虫卵の排泄が無くなっていることを確認する。予防として、定期的に駆虫する場合もある。

(代表的な犬・猫回虫症の駆虫薬です。)



犬・猫回虫症は人に感染し、トキソカラ症（幼虫移行症）を引き起こします。トキソカラ症（幼虫移行症）には眼幼虫移行症や内臓幼虫移行症があります。

眼幼虫移行症は主たる症状として目の病気（網膜脈絡膜炎、ブドウ膜炎、網膜内腫瘍、硝子体混濁、網膜剥離による視力障害、飛蚊症など）が起こります。

内臓移行型の症状としては、発熱や倦怠感、食欲不振などがあります。肺に迷入すれば咳や喘息を、脳内に迷入すればてんかん発作の原因となります。

感染経路としては、砂場で遊んだ後やガーデニングの後に手をよく洗わないまま食べ物を口に運ぶ行為などで虫卵が口に入った場合、トキソカラ症（幼虫移行症）の原因となります。また、感染したニワトリのレバーの生食でも感染した症例報告があります。

予防策としては、野外で土や砂を触った後は必ず手洗いをするようにすること、動物に食べ物を与えるときには、口移しで与えない。鳥レバーの生食を控える。といったところでしょうか。

② 疥癬症

犬・猫の疥癬症はセンコウヒゼンダニが皮膚に寄生することによって引き起こされる皮膚炎です。また、犬猫に限らず、ウサギ、ハムスター、フェレットや野生動物、人にも見られる皮膚病です。

犬の場合は、犬穿孔ヒゼンダニ (*Sarcoptes scabiei canis*) というダニの寄生で起こります。感染した犬との接触によって犬から犬、犬から他の動物、犬から人へ感染する可能性があります。犬疥癬に感染した犬は、疥癬のメスが皮膚内を穿孔し、いわゆるトンネルを作り排泄物を出したり、卵を産み付けるため、強烈なかゆみに襲われます。自ら激しく掻いたり、噛んだりするため皮膚が損傷を受け、二次感染を起こします。好発部位は、肘、脚、耳、胸腹部に見られ、重症化すると体全体に広がります。ちなみにではありますが、日常診察で、診察台に上がった犬はたいていの場合緊張しているため、細菌感染はやノミの感染レベルではかゆみを訴えませんが、疥癬症の場合は診察台の上でも掻きむしっている場合が多く見受けられます。よっぽどかゆいでしょう。

猫の場合は猫小穿孔ヒゼンダニ (*Notoedres cati*) というダニの寄生で起こります。症状は犬の場合とほぼ同じで、激しいかゆみを生じます。好発部位は耳介部、頭部、頸部で重症化すると体全体に広がります。我々は日常診療において、こういった症例が診察に来られた場合、皮膚を搔爬してダニを検出することで診断します。



ヒゼンダニ感染による症状

症状

産卵、排糞などにもなう
アレルギー放出に対する免疫応答

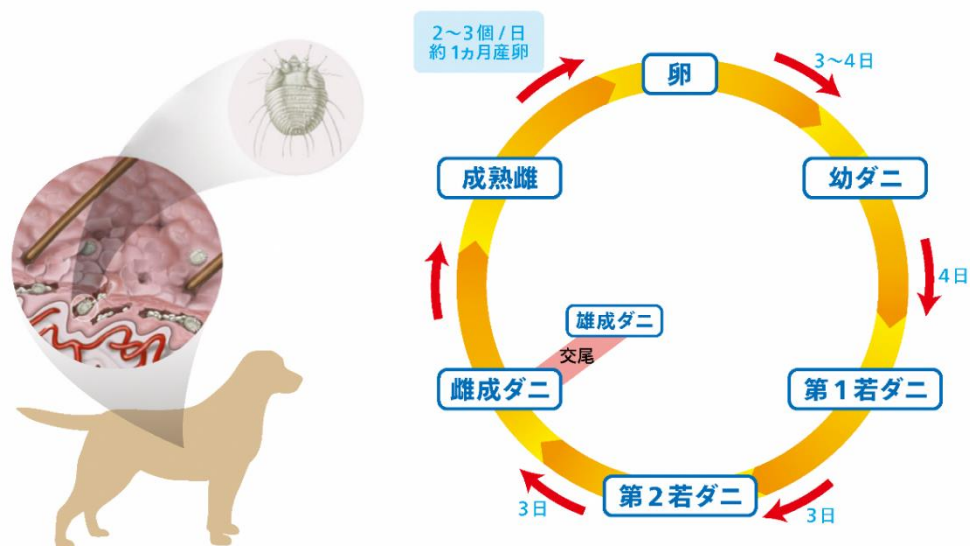
眼周囲、耳介部、肘・膝関節から始まる強い掻痒、
丘疹性皮膚炎、発赤、水泡、痂皮、鱗屑
全身に症状がおよび表皮剥離、自傷性脱毛、
細菌の二次感染、
角化型疥癬（ステロイド使用やクッシングなど）



ヒゼンダニ（疥癬虫）の特徴

<p>イヌセンコウ ヒゼンダニ (<i>Sarcoptes scabiei</i> var. <i>canis</i>)</p>	<p>体長 0.3~0.4mm</p>	
<p>ネコショウセンコウ ヒゼンダニ (<i>Notoedres cati</i>)</p>	<p>体長 0.15~0.2mm イヌセンコウヒゼンダニと比べて やや小型</p>	
<p>感染経路</p>	<p>感染動物との接触感染 短時間の接触や寝具、衣類などを介した感染は稀</p>	
<p>栄養源</p>	<p>宿主の皮脂など</p>	

ヒゼンダニのライフサイクル



監修：山口大学共同獣医学部病態制御学講座 高野 愛 先生

Copyright© 2018 Zoetis Japan Inc. All rights reserved. zoetis

疥癬症の病原体（ダニ）は非常に伝染力が強く、種の異なる動物や人に感染することがあります。また、野生動物の間で蔓延している地域もあるようで、これも問題となっています。犬の疥癬症を引き起こす穿孔ヒゼンダニはキツネやタヌキに感染すると言われ、猫の疥癬症をおこす小穿孔ヒゼンダニはアライグマやハクビシンでの感染報告があります。

この病気は人への感染がしばしば認められます。犬や猫から感染するヒゼンダニは人間の疥癬症を引き起こすヒゼンダニと異なり、人の皮膚上では長期に生存することができません。（概ね3週間程度といわれている。）そのため人での臨床症状は概ね一過性で、感染した動物との接触度合いや、感染した人の体調によって様々です。好発部位は人の腕、脚、腹部などで、寄生部位に丘疹や水泡が認められます。症状が進行すると激しいかゆみとともに角質の増殖が起こります。病変部は白い『フケ』ようなものが認められ、皮膚を掻くことによる二次感染を起こす場合もあります。抵抗力の弱っている人が感染すると重症化します。ちなみにですが、日常診療でこういった場合、罹患動物を治療し臨床症状が改善されていくに従って飼い主さんのかゆみも収まってくるといった経験があります。

同じような疥癬症はウサギやハムスターなどでもあります。人への感染に関しては不明な点が多いため、人に移ることを前提とした対応を取ることが多いです。

セキセイインコに見られることが多いトリヒゼンダニが媒介する鳥疥癬症は、人やほかの動物に感染することはないと言われています。

治療としては、生活環境の改善やイベルメクチン、セラメクチンの投与を行っています。



(犬・猫疥癬症で使用する治療薬の一例)

その他、よく似た病気

鳥疥癬症

原因：トリヒゼンダニに感染することで起こる病気です。

症状：くちばしや目の周囲、脚といった羽のない部分の皮膚にトリヒゼンダニが穿孔することによって病変部は肥厚し、ふけ状の白い塊ができます。強いかゆみが伴う場合は、患部をしきりにかゆがり、止まり木やケージにこすりつけます。犬・猫疥癬症とは異なり、かゆみを訴えない場合もあり、人には感染しません。くちばしに感染した場合は、細長く変形し重症化した場合は欠落します。脚に感染した場合は爪が白く変形し、重症化した場合は欠落します。

治療：イベルメクチンの注射、内服や殺ダニ剤の直接塗布を症状が無くなるまで定期的に投薬します。くちばしやつめの変形がひどい場合は定期的にトリミングする必要があります。同居鳥がいる場合、感染する可能性があるため症状が認められない場合でも同時に治療する場合があります。

予防：日常的に飼育環境を清潔に保つことが大切なのと、新しい鳥を迎えるにあたっては、疥癬症の可能性がないか事前に動物病院でチェックしてもらうことも必要かもしれません。

ウサギ疥癬症

原因：ウサギキューセンヒゼンダニに感染することで起こる病気です。

症状：耳を中心に激しいかゆみを訴えます。頭を激しく振ったり、後ろ足で掻くため患部は脱毛や発赤を起こし、2次的な皮膚炎をおこします。重症化すると顔面や首、足先、外陰部といったところまで病変が広がります。病変部はごつごつした痂皮が認められ、その部分を顕微鏡で確認するとダニの成虫や卵を確認できるため診断がつきます。

治療：イベルメクチンの注射、内服や殺ダニ剤の直接塗布と2次的に起こっている皮膚炎に対する治療を行います。適切に治療が行われれば、7日から10日でごつごつした痂皮が消失し始めます。

予防：日常的に飼育環境を清潔に保つことが大切なのと、新しいウサギを迎えるにあたっては、疥癬症の可能性がないか事前に動物病院でチェックしてもらうことも必要かもしれません。

③ 重症熱性血小板減少症候群（SFTS）

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は、主にウイルスを保有しているマダニに咬まれることにより感染するダニ媒介感染症です。感染症法では四類感染症に位置付けられています。

<フタトゲチマダニ>



<タカサゴキララマダニ>

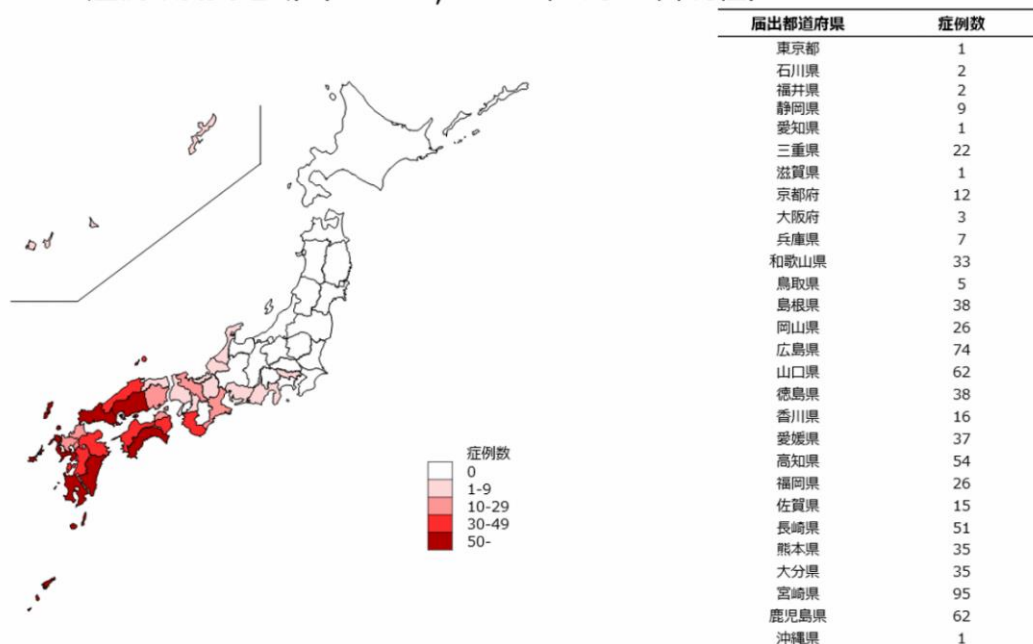


（国立感染症研究所昆虫医科学部より）

原因：ブニヤウイルス科フレボウイルス属に属する重症熱性血小板減少症候群（Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome：SFTS）ウイルスに感染したマダニに咬まれることで感染する病気です。人が感染した場合、6日から2週間の潜伏期間を経て発熱や消化器症状（下痢や嘔吐）を呈することが多く、ひどくなると、頭痛や筋肉痛、意識障害や失語症などの神経症状、リンパ節の腫れ、皮下出血や下血といった出血症状を起こします。致死率は約30%前後と言われ治療は対処療法が中心で、有効な薬剤やワクチンなどはありません。

国内の人における SFTS 感染症届け出地域

図2. SFTS症例の届出地域 (n=763, 2022年7月31日現在)



引用：国立感染症研究所(NIID)HP 感染症情報「SFTS」

国内の動物における SFTS 発症地域

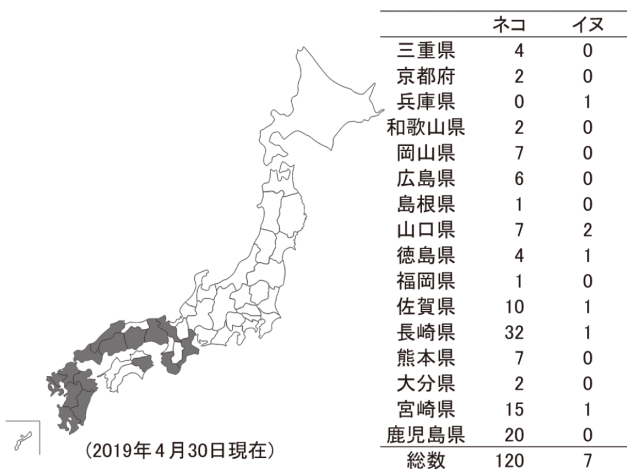


図2. 国内でSFTS発症ネコ・イヌが認められた地域



IASR Vol. 40 p116-117 2019年7月号, IASR Vol. 37 2016年3月号, 厚生労働省 HP 重症熱性血小板減少症候群より

SFTS 感染猫の臨床症状

	該当症例/有効回答		割合
元気・食欲低下	97	/ 97	100%
嘔吐	44	/ 95	46%
下痢	5	/ 95	5%
黄疸	43	/ 43	100%
FIV遺伝子	8	/ 20	40%
FeLV 抗原	0	/ 17	0%
死亡	41	/ 69	59%

猫では元気消失・食欲の低下、黄疸、嘔吐が認められるが、下痢は少ない傾向にある。ただし、致死率は約 60%と高い。

引用元：厚生労働省 HP 令和 2 年度動物由来感染症対策技術研修会 「SFTS 感染症の最新状況について

SFTS 感染犬の臨床症状

	該当症例/有効回答		割合
元気・食欲低下	7	/ 7	100%
嘔吐	2	/ 6	33%
下痢	2	/ 6	33%
黄疸	0	/ 1	0%
死亡	3	/ 7	43%

犬では元気消失・食欲の低下のみが特徴的で、猫ほど特徴ある臨床症状は認められない傾向にある。猫ほど致死率は高くない。

引用元：厚生労働省 HP 令和 2 年度動物由来感染症対策技術研修会 「SFTS 感染症の最新状況について

(SFTS の考える感染経路)

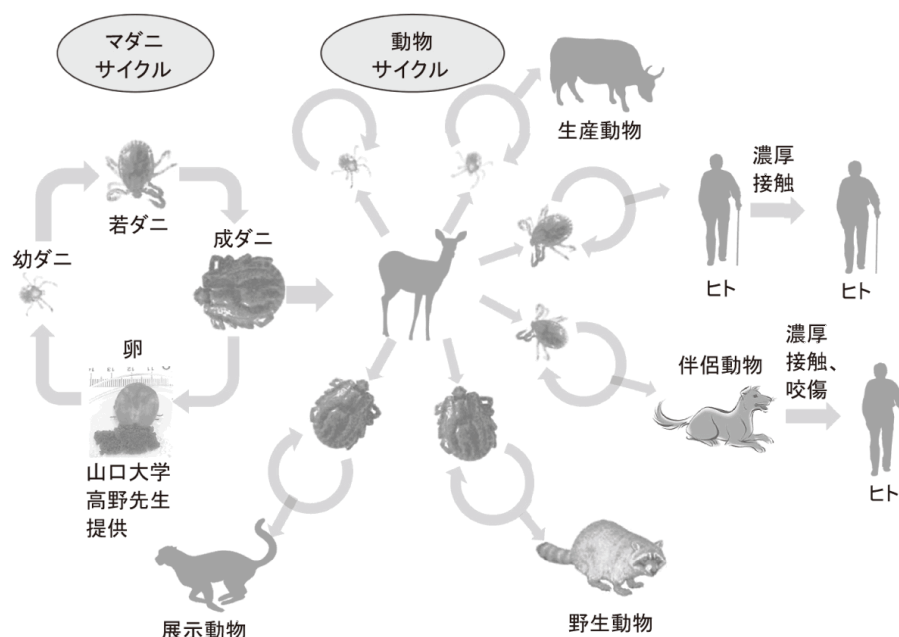


図1. 現在知られているSFTSウイルスの感染環



IASR Vol. 40 p116-117 2019年7月号, IASR Vol. 37 2016年3月号, 厚生労働省HP 重症熱性血小板減少症候群より

予防策としては、ダニを媒介する病気であるため、ダニに咬まれない対策（草鞍に入る場合は長袖・長ズボンの着用等）が必要です。他、ペットである犬・猫のダニ予防（通年）や野良猫から人への感染が報告されているため、保護する場合はこの病気を念頭に置いて対応する必要があると思われます。